

お天気キャスターの仕事の舞台裏

気象予報士 片平 敦

みなさんは、天気予報をどんな方法で知りますか？パソコンやスマートフォンなどでネット上から入手する人も増えてきましたが、今でも、テレビが堂々の1位。気象庁の調査によると、約8割の人がテレビを利用して天気予報を見聞きしているそうです。

テレビの天気予報では、さまざまなお天気キャスターが工夫を凝らしながら、分かりやすく日々の天気を解説しています。私も夕方のニュース番組内の気象解説をかれこれ丸11年担当させていただいていますが、まだまだ勉強の毎日…。僥越ながら今回は、そんな私の一日のようすをご紹介して、あまり知られていない(?)お天気キャスターの仕事内容や苦勞、みなさんに伝えたい想いなどを書きたいと思います。

勤務時間は4分だけ？

嬉しいことに、街を歩いていると「お天気の！」や「片平さん！」と声をかけていただくことが多いです(みなさん、私の姿を見かけましたらぜひ遠慮せず話しかけてくださいね、大歓迎です!)。出演している関西テレビに向かう地下鉄堺筋線の車内で声をかけられることも多いのですが、そんな時にたまに言われるのは、「夕方の番組なのに、こんな時間から出社されているんですね」という言葉。私が関西テレビに出勤するのは、通常は午前10時頃になります。放送の出番は18時前と19時前になりますので、その8時間も前には出社するのです。また、番組内で私が担当する天気予報コーナーの放送時間は通常、約4分ですが、その4分だけ会社に行っていれば良いわけではありません！自分の出番のわずか4分のために、朝からず〜っと時間をかけて、少しでも分かりやすく適切な解説をするために様々な準備をし、全力を傾けることになります。



図1 関西テレビ放送(大阪・北区)

気象解説も復習が大事

出社してまず行うのが、昨日の気象状況の振り返りです。昨日はどんな天気だったのか、気温や降水量のデータなどがすでに速報として出てきていますので、それを自分のノート(お天気ノート)に手書きでまとめて記載します。近畿・全国問わず特異な現象があった場合にはやはり詳細に記録しておきますし、各地の気象台から報じられる生物季節観測(桜の開花、楓の紅葉など)の結果も記載しておきます。地

図2 昨日までの気象の記録

味な作業に見えますが、これは気象解説をするうえで非常に大切なこと。お天気って、みなさんにとってもすごく身近なことですよ。どんな人も日々の天気の違いの中で生活しています。「昨日は暑かったな」「そういえば夜中に土砂降りの雨の音が聞こえていたな」など、視聴者のみなさんと体験や感覚を共有し、放送ではその雨や暑さの詳しい情報をお伝えして、「なるほど」と理解していただく姿勢が大切なのです。さらに、それを踏まえて今後の天気はどう

なっていくのかを考え、お伝えしていくわけですから、前の日の復習は欠かせないことになります。そんな意味でも、天気予報は「超ローカル」。地元に着した視点や解説が必須で、私が常に意識している部分でもあります。

予報の基礎はスパコン

空を見上げて、雲を見て、風を感じて天気を予報することを「観天望気(かんてんぼうぎ)」と呼びます。特徴的な雲のようすやその動きをつかみ取ったり、風の向きや強さを把握したりすると天気予報に利用できることがあり、私も観天望気が大好きです。しかし、観天望気だけでは精度の良い天気予報は十分にはできないもの。実は、現代の天気予報はスーパーコンピュータによるシミュレーションが一番の基礎になっています。気象衛星ひまわりや世界各地の気象台の観測データなどを基に物理学の法則に沿って、スーパーコンピュータを使って将来の地球の姿を予測するのです。1時間後、半日後、1日後、1週間後…。こうして予測されたシミュレーション資料を私たち気象技術者が読み解き、コンピュータでは予測し切れない部分に修正を加え、「明日の天気は雨」「降り出すのは昼過ぎ」など、天気予報という形に整えて発表しています。

夕方のニュースで利用する天気予報の基礎となるシミュレーション資料が気象庁から発信されるのは、午後1時前です。私の場合、放送に向けて、それから午後2時半頃まで最低1時間半ほどかけて、丁寧に資料を分析しています。シミュレーション資料に赤ペンを入れるなどして大気の立体的な構造を把握したり、明日・明後日にかけてどのような展開(気象シナリオと呼びます)が考えら

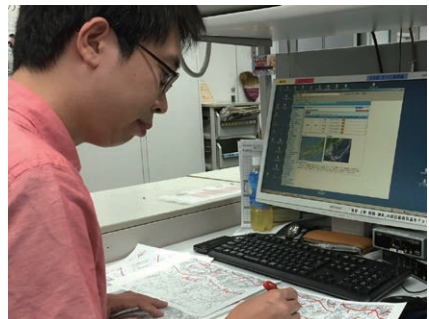


図3 分析・予報検討のようす

れるのか、別の可能性としてあり得ることは何か、注意・警戒すべき点は何か、などを自分なりのメモ資料としてまとめたり…。特にこのメモ資料は、これをまとめることによって頭の中に天気の見通しや考え方などが全て入ってくるため、私にとってこの作業は最も大切と言えるかもしれません。ちなみに、この作業により、みなさんに伝えるべき大切なポイントなどは全て理解・把握できているので、私は放送に当たっては「原稿」というものを書きません。全てアドリブで放送に臨み、その場に最も適した、原稿を読むわけではない、生の「自分の言葉」で天気の見通しを伝えることになります。そのため、上手に話せずにつつかえてしまうこともあるのですが、逆に、自分の本当の話し言葉でお伝えできるので、視聴者のみなさんの心には響きやすいのかな、と思っています。

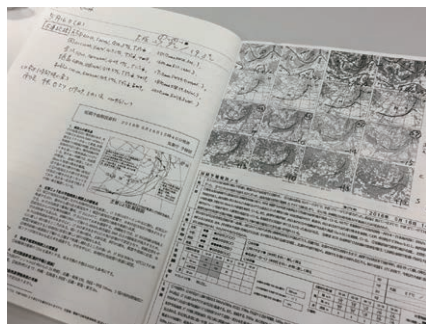


図4 お天気ノート

ちなみに、作成したメモ資料も先述の「お天気ノート」に貼り付けています。月に1冊のペースで消費されていき、これまでに130冊以上になりました。アナログなやり方ですが、手を使って書いたこと・まとめたことは不思議と記憶に深く刻み込まれていますね。学生時代に同じようにもっと勉強しておけば……と思っても後の祭り(汗)。やはり、好きなことであれば全く苦にならないものです。

解説画面は自分で作成

メモ資料に書いた内容は、気象学的な考察を気象学の用語を多用しながらまとめているため、当然ながらそこに書かれたままの言葉で放送することはできません。それをどう分かりやすく伝えるかが、気象解説者としての腕の見せ所。技術者として把握した天気のポイントなどを、どのような言葉で伝えどのような画面を使ってお伝えすれば視聴者のみなさんに分かりやすく理解してもらえるか、という点です。

関西テレビの天気予報の画面は、「明日の近畿の天気」や「予想天気図」など主に気象庁から発表される情報・データから自動的に作成される画面が400種類以上あります(おそらく、全国でもトップクラスです)。その中で、当日お伝えする内容に最も適した画面を数種類選び、いわば紙芝居の要領で端末上で順番に並べていきます。そして、例えば天気図上に矢印マークを描いて重ねたりイラストを載せたりなど、視聴者のみなさんの理解をより助けるよう



図5 多種多様な解説画面

な画面加工を行うのですが、それは全て私が自分で行っています。

頭の中で思い描いた、「南から暖かく湿った空気がビュー〜っと流れ込むようす」はどんな図解だと分かりやすいかな。「上空に寒気が流れ込むようす」はどういったイラストで、どういった展開だとしっかり伝わるかな。…気象学的に難しい内容であっても、テレビの特性をめいっぱい活かしてイラストや動画を多用すると、適切に伝えられる場合が多いのです。

私たちお天気キャスターの仕事は、「視聴者のみなさんに”天気予報をお伝えすること”」。“私たちが”伝えた気になってもダメで、“視聴者のみなさんに”伝わっていなければ意味がありません。お天気キャスターにとって最も大事なことのひとつは「思いやり」の心だと思います。どうすればしっかりと伝わるのか、日頃から少しでも良いものを目指して奮闘しているところです。

いよいよオンエア!

衣装として用意されたスーツに着替えたりメイクをしてもらったり(!)しつつ、17時45分頃と18時45分頃の出番に向けて、準備が進みます。画面の加工・作成はもちろん順次行っていくのですが、天気は刻一刻と変化するもの。現状を監視する画面やスパコンの最新のシミュレーション状況も逐一チェックし続けます。あまり多くないことではありますが、最新の状況で事態が急に変わり、解説内容に修正が必要な場合もあります。そんな時は放送の直前まで、使う画面を変更・追加したり、画面の加工内容に修正を入れたり、より適切な解説ができるように全力を尽くすこととなります。この際、事前に原稿を全く書いていない点が、最新の状況にすぐさま対応できるメリットのひとつかもしれませんね。

また、天気予報はニュース番組の終わりのほうに予定されていることが多いです。突然、大事件や大事故のニュースなどが入ってくると、当初の予定よりも天気予報の時間が短くなることも頻繁にあります(逆に、長くなることもあります)。そんな場合にも、原稿を書いていないため、時計を見て残り時間を把握しながら、自分の言葉で話す内容の分量を調節しつつ解説しています。

一定でない放送時間で毎日しっかりと時間通りに解説を終えるのはなかなか簡単ではありません。特に、ほかの出演者の方々とお話をしながら進める場合には、どんな質問がいつ飛んでくるか分からないため、なおさら大変です。当日や翌日の気象状況の把握はもちろんのこと、日頃からより深い気象の知識(さらにはその周辺の分野の知識も)を身につけておかなければいけな

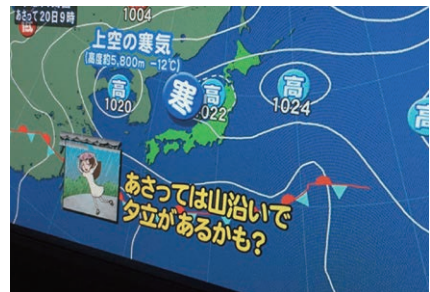


図6 解説CG画面の例

いのですね。

決められた時間の中に収めつつ、分かりやすく伝える解説をする。ある意味、気象解説は「職人」の技術なんだとあっていただけたら嬉しいです。

何もない所を指す？

職人の技術といえば…。私が担当する天気予報コーナー2回のうち、1回は大型モニターの前での解説ですが、もう1回はなんと「緑色の壁」の前での解説です。これは「クロマキー」と言って、緑色の部分に映像や天気図など別のものを合成する放送技術を使った解説になります。技術的に画面に合成をしているので、スタジオ内で後ろを振り返っても、私の目には緑色の壁しか見えません。



図7 クロマキー(緑の壁…)

ですが、私はいかにもそこに天気図などがあるように指し示しているわけなのです。

実は、私を撮影しているテレビカメラの下方には、今何が実際に放送されているかを示したモニターが置かれています。そのモニターには、天気図などと合成された自分の姿があるわけです。それを頼りに正しい場所を指し示しているか確認しつつ、解説をしているのです。

これが慣れるまではなかなか大変で、「近畿地方は…」と言っているのに北海道を指してしまったり…。テレビ画面に映る自分の姿は「鏡に映った姿ではない」というのがネックです。自分が右に動くと、テレビの中の自分は画面を右から左へ逆に動くため(その動きが正しいのですよ！鏡の場合は左右逆になっているので)、慣れないうちは微修正もうまくできなかつたりします。気象解説の内容そのものに加えて、放送上、こんなテクニックも必要になってくるのですね。

予報の上手な利用法

毎日天気予報をお伝えする中で、「…で、結局雨は降るの？降らないの？」と問われることがたまにあります。でも、現代の気象予測技術では、ハッキリと自信を持つては言えない場合があるのも事実です。

その一方で、天気予報は「万能」ではありませんが、「無能」でもありません。降るか降らないか微妙な状況であったり、まだハッキリとは分からない状況であったりする場合にも、人間側の対処の仕方(心づもりや具体的な準備など)によっては、その最大限に価値を高めることができるのです。

テレビやネットの天気予報で、お天気のマークだけ見て納得してしまっている人はいませんか？でも、例えば同じ「雨」のマークでも、「ほぼ間違いなく降りますよ」

と言える場合もあれば、「降らない可能性も大きい」のだけど、降る可能性のほうがかろうじて大きいので、マークで表すのであれば「雨」になる」という場合もあり、マークをチラ見しただけでは分からないことも少なからずあるのです。そのために、ぜひ好きなお天気キャスターを見つけて、その人の解説を日課のように聞くようになさってください。気象予報士であれば、上記のような「自信がある時」「微妙な状況である時」の違いも含めてしっかりと解説します。

「今度の週末は雨の予報だけど、野外レジャーの予定はもうキャンセルしたほうが良いのかな」「明日は雪の予報だけど、早起きしておいたほうが良いのかな」など、マークを見ただけでは分からない部分を意識して、私は日々の解説に臨んでいます。キャスターごとの個性や特徴的な視点もありますから、ぜひあなたの「お天気の“かかりつけ医”」を見つけて、上手に天気予報を使っていただければと思っています。



図8 スタジオ内でのようす

おわりに

お天気キャスターはテレビのニュース番組に出演しているキャスターの中でも、視聴者のみなさんから特に親しみを持っていただくことが多いと感じます。殺伐としたニュースをお伝えすることが多い番組の中でも、穏やかな天気の時にはほっこりと、自然や空のことを伝えてくれる時間だからなのかもしれません。「平時は楽しく、災害時は命を守る解説」をモットーにして、これからも日々の放送に臨んでいきたいと思っています。今回の記事が、みなさんが天気さらに興味を持ってくださるきっかけになれば幸いです。

最後に、執筆にあたって、関西テレビ報道センターのみなさま、お昼前の天気予報を担当している同僚の気象予報士・小林正寿さんには、写真撮影など大変なご協力をいただきました。この場を借りて心から御礼申し上げます。

著者紹介 片平 敦(かたひら あつし)



友の会会員。気象予報士・防災士。2003年法政大学人間環境学部卒。関西テレビ「ワンダー」出演中。ウェザーマップ所属。関西の天気を伝え続けて今春で12年目に。地域に密着し、信頼される「天気の町医者」を目指す。